

殿村遺跡とその時代Ⅳ

—平成25年度調査報告会・講演会の記録—



2015

松本市教育委員会



1 虚空蔵山に架かる虹 (2014年秋撮影)



3 信濃の道者お祝い配り日記
 (堀内家文書・松本城管理事務所蔵)
 会田の寺として、系ヶ寺・知見寺・長安寺
 の名が見える。



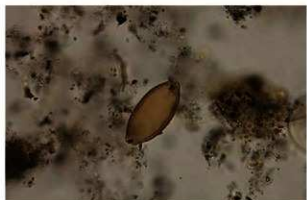
2 字系げ付近で見つかった石積み (2014年)



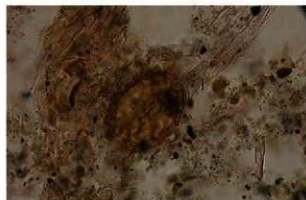
4 信濃国筑摩郡会田町絵図 (大河内忠則氏蔵)
 「殿村」の北(画面下)に「字系げ」が見える。



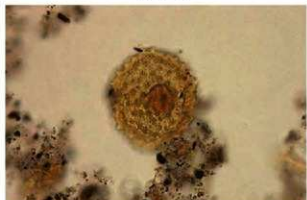
1 第4次調査で見つかった石積み遺構（室町時代・15世紀後半）



a 糞虫の卵



b 回虫の卵



c ベニバナの花粉



d 虚空蔵山城跡から見つかったソバの花粉

2 石積み遺構内の粘土から見つかった寄生虫卵と花粉（撮影：辻 誠一郎氏）

口絵 2

目 次

口絵	3
目次	6
例言	6
平成 25 年度調査報告—近世資料に現れる中世—	7
講演会「殿村遺跡とその時代—環境史から見た中世の景観—」	
東京大学大学院教授 辻 誠一郎	15

例 言

- 1 本書は、松本市教育委員会が主催し、平成 25 年 10 月 12 日（土）にピナスホール（松本市役所四賀支所 1 階）で行った「殿村遺跡とその時代～平成 25 年度調査報告会・講演会～」の内容を収録したものである。
- 2 本文は、松本市教育委員会が録音したものを文章化し、発表者が加筆・修正を加えた。
- 3 押図は、当日の配布資料、スライドから再構成し、発表者の指示の下、必要により加除した。
- 4 押図中に示した文書の読解は、青木教司氏に依頼したものである。
- 5 本書の編集は、文化財課埋蔵文化財担当が以下の作業分担で行った。
文字起こし：宮島義和、押図・本文編集（DTP）：竹原 学

平成 25 年度調査報告—近世資料に現れる中世—

松本市教育委員会の宮島義和です。よろしくお願ひします。

現在、殿村遺跡の発掘調査は順調に進んでおりますけれども、その一方で私たちはまだ地元に残っているいろいろな文書や絵図などの資料の掘り起しや、あるいは地域にお住まいの方から西賀の昔のことについてお話を伺うなど、所蔵資料調査とか聞き取り調査と私たちが呼んでいる活動を、皆さんのご協力のもとに行わせていただいています。そこで、今年はちょっと趣向を変えて、所蔵資料調査の途中経過を報告させていただきたいと思ひます。

「近世資料に現れる中世」ということで、現在私たちは殿村遺跡や虚空蔵山の城跡など中世の遺跡を追い求めております。基本的に文献資料も中世のものがあればよいのですが、なかなか江戸時代より前のものは残っていない場合がほとんどでありまして、中世以前の資料をみつけるのは大変難しいのです。しかし少し時代のすそ野を広げると、例えば図 1 に示した安政 6 年（1859）8 月に書かれた日記、これは四阿山の運宮について地元の人が描いた虚空蔵山の絵図ですが、こういったものが思わず見つかることがあるの

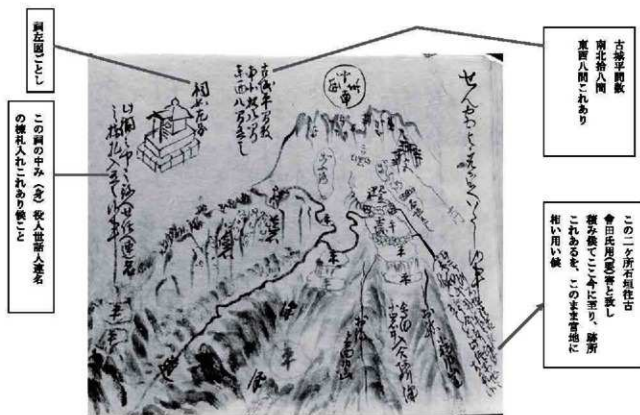


図 1 安政 6 年虚空蔵山絵図（堀内健氏蔵）

です。図には「古城」というふうに書かれております。多分中ノ陣のことを示していると考えられるのですが、これは江戸時代の人々が描いた虚空蔵山の絵の中に中世の遺構、城の跡が現れているという例であります。平、平、平とあります。これが会田小次郎の要害ではないのかというふうに書かれておりますけれども、このようにして時には意識して、時には意識をしないで中世の面影が近世の資料の中に残っている場合があるのです。今日はこのように近世の資料に現れる中世の姿について、調査資料の中から特に興味深い 2 点にしぼって取り上げさせていただきたいと思ひます。



図2 お説い配り日記の表紙

志奈の国遣者之御蔵く者里
日記
かのと能
天正九年 宇治七郎右衛門尉
三能とし
かみ数廿八まいし申し候
久家花押

図2は「堀内家文書」の中の、前回榎本先生の講演の中でご紹介をいただいた「お説い配り日記」という古文書の表紙です。表紙の字をそのまま書き表しますと、「志奈の国遣者之御蔵く者里日記 天正九年かのと能三能とし 宇治七郎右衛門尉久家（花押）かみ数廿八まいし申し候」となりますが、これを現代語に直しますと「信濃の国遣者のお説い配り日記 天正9年（1581）辛の日の年 宇治七郎右衛門尉久家（花押）紙数28枚とし申しそうろう」となります。これが私たちの会田に残る非常に価値の高い中世の史料であります。時期は「天正九年」と書かれておりますので西暦に直しますと1581年、なんと会田氏が滅亡する1年前に書かれたものです。そしてこの中でちょっとした発見がありました。

これは「お説い配り日記」の一部に過ぎないのですが、この中にたくさんのお寺の名前が出てきます。「あい田分」と書かれております（図3）。ま

ず知見寺と書かれている部分ですが、このお寺はご存知でしょうか。知見寺況、字知見寺という字名が今も残っています。かつてこの会田には知見寺というお寺があったと言われておりますけれども、この史料から知見寺が戦国時代には実際に存在していたことがはっきりと分かります。宇治七郎右衛門尉が伊勢神宮の且那それぞれにお土産を渡してお札を配り、お金をもらってくるわけですが、「お説い配り日記」は各且那に渡してくる物のリストになっています。お土産の内容には格差があります。例

えば知見寺ですとお土産は「茶十袋、あおりの、ふのり」をもらっています。これが知見寺の特選ですね。次は皆さんご存知のとおり長安寺です。残念ながら今年建物は倒壊の危険があるため解体されてしまったわけですが、長安寺は何をもらっていたかという、やはり「茶十袋、あおりの、ふのり」ですね。それから「ふた寺」ですがこれは補陀寺のことですね。この名前のご存知の方が多いと思えますけれど、幕末まで旧会田小学校の体育館周辺にあったお寺です。補陀寺は何をもらっているかといいますと、やはり「茶十袋、あおりの、ふのり」なんです。そして、その隣です。「むれう寺」これは無量寺のことですね。で



図3 「お説い配り日記」に記された会田の寺
(松本城管理事務所蔵)

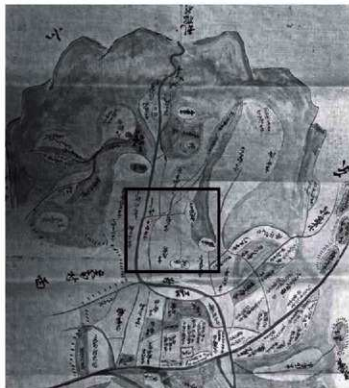


図4 信濃国筑摩郡会田町村絵図（大河内忠則氏蔵）

いは当時のかな使いではえげ寺と読む場合もあったかもしれないですけど、このお寺についてはなんの知識もありませんでした。そして驚くのはお土産の内容です。「上の茶十袋」なんですね。実は会田の中で上の茶をもらっているのは、会田の領主と言われる「岩下殿」とその隣に名前が書かれている「岩下筑前守殿」だけなんです。ということはこの糸ヶ寺という寺はかなり格の高い寺だったと考えることができると思えます。

しかしこのお寺、現在は影も形もありません。いったいどこにあったんでしょうか。同じように現在は存在しない知見寺の位置もはっきりしませんけれども、地名や言い伝えから知見寺沢のどこかにあったであろうことは容易に想像ができます。まったく手がかりを得ませんが、知見寺から一つ尾根を越えて、長安寺、補陀寺、無量寺はいずれも殿村遺跡と同じ岩井堂沢の中で、互いに近い所にありますから、おそらく「あい田分」の糸ヶ寺もこの近辺にあったんじゃないかというふうに漠然と考えていたのです。

ところがこの調査がきっかけで、それを彷彿とする地名をみつけることができたのです。図4は大河内家文書の中から見つけた、「松平丹波守榊原預所信濃国筑摩郡会田町」という江戸時代の絵図です。文化10年（1813）以後に描かれた絵図であります。なぜ文化10年以後かといいますと、この中の畑に「文化十年の書入」と申しまして、耕地起こしをして年貢を払う畑にしたという記述がありますので、1813年以後に描かれた絵図ということになります。この絵図を眺めていますとある部分に目が向きます（図5）。ちょっと南と北が逆になっていますけれど、上の方に「字殿村」と書かれておりまして、そして札（補陀）寺があります。左には長安寺があります。目を転じて下を見ると廣田寺が見えます。そしてその右に「字糸ヶ」という地名が書かれているのお分かりになりますか。「糸ヶ」という2文字が見えるんですね。ここで重要になるのは、この「糸ヶ」と書かれた地名と、「お説い配り日記」に登場する「糸ヶ寺」との関係です。このお寺が「あい田（会田）」にあったことは間違いないので、周辺の状況から考えて、この付近に糸ヶ寺があった可能性が十分考えられるのではないかとこのひとつです。

もうひとつが廣田寺です。廣田寺は天正9年の段階ではまだ存在していませんが、寺伝からその前身は知見寺だったと言われてます。そこで、知見寺がここに移って来て廣田寺という名前が変わった、そして

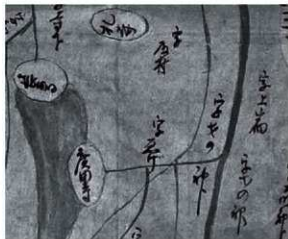


図5 殿村を囲む寺と字糸ヶ

は無量寺はどれだけもらっているかといいますと、茶は5袋になっていますけれど、やはりあおりの、ふのりをもらっています。

ところが、私たちがこの「お説い配り日記」を見た時に謎だったのが、ここに「糸ヶ寺」という寺の名前が出てくることです。えげ寺ある

糸ヶ寺がこの地にあったという前提に立つと、石積などの遺構が発掘された殿村遺跡は、礼（補陀）寺、長安寺、廣田寺（知見寺）そして糸ヶ寺という四つの寺院に囲まれていたことになるのです。そして西側を岩井堂沢で区切られている。そういう空間に殿村遺跡があったということになります。ではこれがいったい何を示しているのか。まだ私たちはそこまで分からないのですけれど、地元歴史研究者である市川恵一さんは、もしそうだとすれば風水で四天王を示しているのではないかという興味深いお話をされておりました。このように四つのお寺に囲まれていたとすると、その関りのなかで殿村遺跡の性格についてもまたいろいろ考える余地があるのではと思っています。

なお、「お祓い配り日記」の中にはお寺のほかにも、前回の講演で榎本正治先生がお話しされたように、



図6「会田と板場村 文右衛門控」と「糸ヶ分」の記述（小口正治氏蔵）

宗教者と考えられる人の名前がのっております。お寺と同じようにあおりの、ふのりをもらっている人たち、「河原さきのりんすそ」とか「はんやう」とか、ちょっとどんな人たちなのかと思うんですけど、宗教者と思われる人たちの姿も見えます。

こんな思わぬかたちで「糸ヶ」という場所が確認できました。しかし、「糸ヶ」が出てくるのはこれだけではなく、実は他の史料にもあるのです。

図6は小口家文書にあります「会田と板場村 文右衛門控」慶安5年（1652）のもので、ようするに文右衛門さんが所有する田畑の面積や等級あるいは年貢高を示したもののなんです。その中に図8のような箇所があります。これをそのまま現代の漢字に直します。その中に赤で示した場所「糸ヶ分」「同所」「同所」というのが出てまいります。「下畑 糸ヶ分 五畝十二歩 同所五畝十二歩 同所平三郎分 一反六歩 下畑二反一畝歩 分畑一石二升六斗」と書かれております。さて「糸ヶ分」とは何を表しているかと言いますと、その場所の名前を表しています。最後の平三郎分というのは平三郎という人の持ち分だと思いますが、なぜ「糸ヶ分」が場所の名前を表しているかと言いますと、「糸ヶ分」の下に「同所」と書かれています。同じ場所だよ。要するに江戸時代のこの段階では、かつては糸ヶ寺の持ち分だったかもしれない畑なんですけれども、それが糸ヶ分という地名に変化してしまっているわけです。特にこの文書を書いた人がそれを伝えようと意図はしていないんですけども、こんなところにも中世の痕跡が残っている場合がある、そんな一例としてあげさせていただきます。

ではもうひとつの例に移ります。

図7は殿村遺跡の第1次調査の概報にのせましたが、大河内家文書の「會田郷往古之略図」、文禄3年（1594）ですから、もう中世の最終末ですな、その輪図の写しがありまして、それを私たちが再トレースしたものです。「會田郷往古之略図」「後の世の人のためにこれを記しますよ」というふうに書かれていて、い

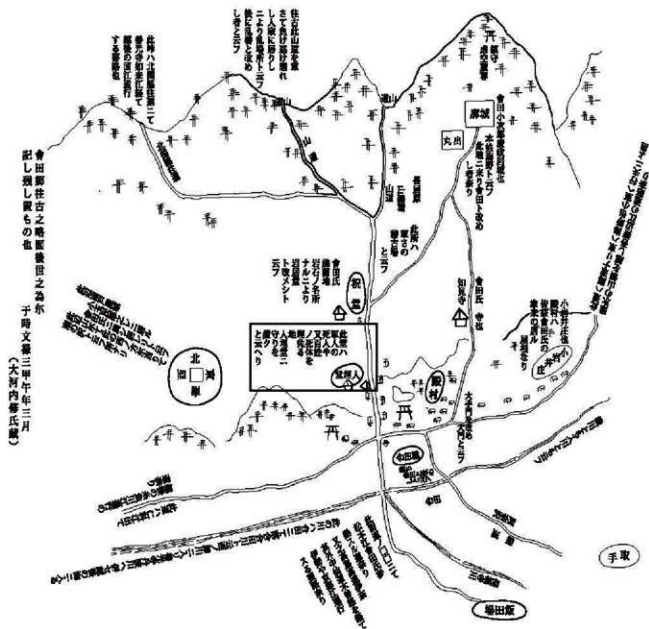


図7 『会田郷往古の略図(写)』文禄3年(1594)とにぢみ堂(原図をトレース)



図8 にぢみ堂の遠景と宝篋印塔

ろいろな情報がここから得られます。この中で私たちが注目したのは、図中に四角く囲んだ「人埋堂」と書かれた部分です。「この堂は軍人の死人やまた百姓の死体を埋める地 人埋堂に守りを置くと云えり」と記されています。かつてここにお堂が建っていた。そこに軍人の死人とか百姓の死体を埋めていた。文禄年間においてはすでにそれが普通だったということが分かるわけです。で、現在この場所を私たちは「にごみ堂」と呼んでいます。

図8左が現在のにごみ堂の全景になります。新しい農道に沿って半島状に突き出した小高い地形をしている場所です。地元ではここが「にごみ堂」と呼ばれていることを、私たち殿村遺跡を発掘するようになってから知りました。このにごみ堂には現在どんなものがあるのでしょうか。墓地となっている小高い丘の中に入っていくと、一つには古い石塔があります(図8右)。特に注目したいのは写真右側の石塔で、これは中世の宝篋印塔と呼ばれるものです。しかしどうもいくつかの石塔のパーツを寄せ集めて重ねたような感じがします。ほかに墓石の前に宝篋印塔の相輪部分と思われるパーツがいくつも並んでいるのが見えます。また、松本市立博物館には、ここから出土したと言われる中世の板碑が展示されています(図9)。このようなことから、にごみ堂は中世以前までさかのぼる歴史の古い場所であることが十分考えられます。

このように、にごみ堂は名前からしても地形から見ても非常に興味深い場所なのですが、そう思ったのは私たち現代人だけではなく、すでに何百年も昔の人たちが興味関心を抱いていたらしいことが分かる、実に面白い資料が見つかりましたので紹介します。

図10は堀内家で所蔵している「乙 安政二年卯七月吉日 家内諸記録」という日記です。安政2年は1855年になりますけれども、この記録の中ににごみ堂が出てまいります。まず記録について見てみたいと思います。日記の体裁は写真に示すとおりです。帳面の中ほどに絵が描かれているのが分かると思いますけれども、にごみ堂の記述の部分は、「安政7年2月24日」、「当日もにうみ堂掘りそうらえどもなにも出で申さざるよし、ただ出そうろうものはよほど古き骨のみだいぶ出でそうろうよし、場所図の如し」と書いてあります。ここでは「にごみ堂」ではなく「にうみ堂」という呼び方がされていますが、



図9 にごみ堂出土の板碑
(松本市立博物館蔵)

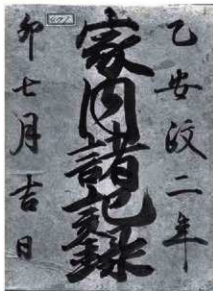


図10 「家内諸記録」表紙とにごみ堂の部分 (堀内健氏蔵)

図11は絵の部分の拡大です。南北が逆になっておりますけれども、これはなんと江戸時代の人がにごみ堂を発掘した時の図面と言ったらいいのでしょうか。見取り図のようなものが描かれ、穴があると書かれています。そしてその周りは石積みになっている。また、この穴は「一円芝地の所を掘って出て来た」とも書いてあります。それで面白いのは、「この角の石は2枚石を門のごとく開き」と、まるで古墳の横穴式石室のような感じなんですけれども、そういう石積みで囲まれた穴がありました。しかもその中から死体がたくさん出て来たというから驚きです。ところで当時の人びとはなぜ発掘のようなことを行ったのでしょうか。実は、それは学問的探究心で行われたわけではなくて、何のためかというところを拓いて畑にしようとしたわけですね。それで発掘は早々に終わって骨は元に戻され、穴も埋められて畑になります。その続きを見ますと、「畑にいたし堂免にあいなりそうろうこと」と書かれています。堂免というのは、お堂があったことによって免畑、要するに租税を免じてもらえる畑になったことを示します。そしてその後の部分ですけれども、「右につき自分心得だけひかえ、右場所は往古よりみゆうみ堂と申えそうろう、古跡目安の場所ごとに、いにしえ何人のや會田と申す郷士の一門にや存ぜずそうらえども何れ、格有りの者の墓と見ゆ」と書かれています。どうということかと言いますと、会田氏かもしれないけれども、それなりに格の高い人の墓ではなかったのかなというふうに堀内家のご先祖は書き残しているのです。



ここに紹介した資料は日記で、すでに文禄の時代から死体を埋める場所、死人を埋める場所、そういう場所として定着し、皆知っていた所について、それを記録として後世に残すために記された貴重なものなのです。日記というこのような近世の資料からも、中世以前の様子がうかがえる有益な情報を得ることができる。地域に埋められた資料には、まだそういう可能性がたくさんあるんだということを、私たちはこの調査を通じて知ることができました。これもひとえに調査にご協力をいただ

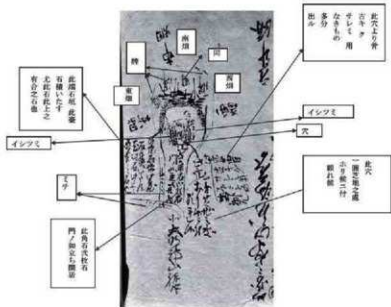


図11 にごみ堂発掘の見取り図

いた地域の皆様のおかげです。

私たちはこのように発掘調査から得られる情報以外に、すなわち遺物とか遺構といったもの以外でこの四賀地区にまだ眠っている資料を探し出し、所有者の方をお願いして写真等を撮らせていただいたり、またお話をじっくり聞かせていただいたりして、この殿村遺跡の総合調査の中で一つの柱となる資料として位置づけたいと考え、このような作業をしております。今まで寺社を含めて9軒の方の家を訪ねさせていただきましたけれども、皆さんいずれも親しく対応していただいて大変ありがたく思っております。現在のところ個人で所蔵の資料は、40件47点を調べさせていただくことができました。そして、お寺や神社に関係する資料は309件340点に達しております。こうして集まった資料を正確に読み解くため、古文書の専門家にも全面的な協力をいただいています。具体的には、解説した内容を写真とともに文書データにしてパソコンに保存し、聞き取り調査で録音した内容はすべて文字起こして文書ファイル化する。そういった方法で貴重な資料を後世に残し、また調査の参考にさせていただこうと考え、発掘調査と並行して少しずつ作業を進めています。

最後に皆様にお願ひがあります。きょうお集まりの方で昔の資料をご所蔵の方はいらっしゃいますか。よく「うちの資料は大したことないから」と言われる方がおられますけれどもそんなことはありません。そこに何がひそんでいるか分かりません。資料の一つひとつすべてが素晴らしいものばかりです。一つひとつが本当に貴重な内容をもつものなのです。江戸時代のものでも明治・大正時代のものでも、その中から何を拾い出せるかは内容を読んでみなければ分からないのです。そこで資料をご所蔵の方がいらっしゃいましたら、ぜひとも私たちにお知らせいただきたいのです。皆さんのふるさとの歴史を皆さんが主役となってひもとくするためにも、ごひご協力を願ひします。

調査報告はこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。



当日の周知ポスター・ちらし

殿村遺跡とその時代—環境史から見た中世の景観—

東京大学大学院 教授 辻 誠 一 郎

環境史とは

皆さんこんにちは。大変丁寧なご紹介をいただきありがとうございます。分野が多岐にわたっているのがわが分からなくなったという方がおられるのではないかと心配いたします。私はもともと地球科学、地球惑星学の分野で研究をしておりましたが、その後、生物科学とくに分類学や生態学の分野で植物分類・生態学に携わりました。さらにその後は考古・歴史・民俗の分野に180度転向し、ついに今いる新領域というところで研究をしています。今回みなさまにお話しするのは環境史という世界ですが、これは複合領域あるいは学融合といって文理融合を成し遂げようとしている分野の一つだといえるかもしれません。環境史研究では、さまざまなレベルの環境変動、人と環境との関わり史、人と植物の関わり史が主な対象になります。殿村遺跡の発掘調査では中世の環境史を読み解くことも重要な課題になると判断されたので私を呼んでくださったと理解しています。たぶん殿村遺跡には環境史を紐解くための膨大な資料が埋蔵されているとの判断からだと思います。私は生態学を基盤としながら地形・地質学、古生物学、年代測定学などを融合させながら環境史を読み解こうとしているのですが、日本ではまだまだ未熟な分野だといっても過言ではありません。国際的には重要視する傾向にあり、とくに遺跡の保存や公開活用という面において環境史研究をベースに考えていかなくてはいけないという風潮が高まってきています。期待がもたれている分野だともいいと思います。そういう意味で情報量が多いと見られる殿村遺跡で環境史の調査・研究ができることは喜ばしいことですが、もう3年にもなるというのによやくお尻に火がついたといったところで申し訳なく思っております。環境史については発掘調査だけで見えてくるものは少なく、室内での観察や分析の蓄積が必要ですので、これから明らかになってくることにご期待ください。ここでは殿村遺跡と周辺域での遺跡の調査から分かってきたことを中心に、今後の期待や展望をお話したいと思います。

まず環境史という見方、捉え方についてお話ししておきたいと思います。殿村遺跡や松本という所から少し離れて、広い視野にたって環境史という捉え方をお話してみたいと思います。具体的には環境変動と生態系変動、人為がつくる生態系すなわち人為生態系あるいは里山、そして殿村遺跡や周辺域の遺跡から見えてくる生活文化と生態系について考えてみたいと思います。

環境変動と生態系変動

環境史研究ではさまざまなレベルの環境変動を取り上げると申しましたが、その環境変動とはどのようなものかをまず考えてみたいと思います。考古学や歴史学でよく対象になる環境変動とは、その多くが気候変動です。気候が寒冷化あるいは温暖化するという寒暖の変化です。厳密には大気・海洋にあらわれるさまざまな気象・気候変動です。しかし環境変動は気象・気候変動だけではなく、気候変動によって生態系あるいは景観が変動することもあります。あるいは地球表面での突発的な事件としての地震・津波も環境変動です。日本では頻発する火山噴火も重要な環境変動です。気候変動が起こりますと海面変動が引き起こされます。寒冷化すると海水が水蒸気となって大気に吸い上げられて海面が低くなります。偏西風の風下側で大量の水河が形成されるのです。温暖化すれば水河が溶けて海面が上昇します。それで海面変動が起こるのです。昨今では地球の温暖化が問題になっていますが、このまま温暖化が進むとあと20年くらいで海面

が2mほど高くなるとされ、海面下に沈んでしまう島や町が出てくるのです。大変なことです。こうした環境変動は生態系の変化も引き起こしてしまいます。今年はとても暑いですね。私は東京のほうから来ましたので今日はクールビズで失礼しています。地球温暖化は人が引き起こしているという説もありますけれども、必ずしもそうとは言いきれません。これからお話しするように中・長期的な環境変動に乗っかっているだけかもしれません。こうした変動に伴って、今までふつうに存在したブナ林がしだいに衰退し、ついにカシ類からなる常緑広葉樹林に変わってしまうことだってありうるのです。これが生態系の変動です。人の生活文化がかわってしまうことだってあります。これも生態系の変動です。どういう関係にあるのかということはおおい殿村遺跡や松本盆地との関連でお話ししたいと思います。生活文化というのは大いに環境と関わりがあります。人というのはさまざまな環境要素と関わり心というものをつくっていくというふうに私たちは理解しております。謎解きなんかで「その心は」と聞いたりしますね。その心が生活文化を作り上げていくわけですから、生態系と生活文化は深く関係しているといえるのです。殿村遺跡とその周辺域の生態系と生活文化のかかわりを読み解くことが私に課せられた課題ということになるわけです。

皆さんのお手元に配られている資料の最初に絵画資料を載せさせていただきました。これは16世紀の終わりころから17世紀の初めに活躍したオランダの画家が描いたものです。写実的な冬の景色を描き残しています。なぜこれを出したのかといいますと、16世紀後半から17世紀前半にかけては世界的にも気候が寒冷化した時期で、もう少し前の14世紀の初めころから18世紀前半までの期間にわたってとても寒冷な時代があったことが明らかになっています。この時代を小氷期と呼んでいますが、さらに三つの氷期に細分されています。オランダの画家が描いた時期は二つ目の氷期がピークに達していたころです。冬の景色には運河が全面結氷しており、運河の上を人々が行き来している様子が描かれています。氷を削りだしているところがあるのですが、厚さが50cmもあるのです。現在では結氷することはありません。それほどに気候が寒冷化すると、それ以前ではドイツでもブドウが収穫できてワインが作れたのに、ブドウが作れなくなってワインの生産域が南下してしまったのです。ドイツ人は自家製のワインが飲めなくなってしまったわけです。環境史研究のほんの一例にすぎませんが、環境変動、生態系変動、生活文化のかかわりを示す典型的な事例であると思います。この資料を紹介したのは殿村遺跡とその時代がこの寒冷期すなわち二つ目の小氷期にあたることを示したかったからでもあります。

環境史研究では考古学が調査の対象としないものが多数あります。遺跡の発掘調査では、植物の種子・果実や、昆虫、哺乳類や鳥類などの骨なども対象になります。顕微鏡的な花粉や孢子を調べることも重要な手法になっています。地質や地形も重要な対象です。そのなかで年代測定はたいへん重要な研究課題になっています。放射性炭素年代測定法というのですが、C14という放射性炭素が一定の時間をかけて窒素に変わっていくという化学的性質を利用して年代を測定するのです。皆さんが新聞報道やニュースで、この遺跡は5000年前だとか見聞きされることがあると思いますが、その年代のほとんどはこの放射性炭素年代測定法で得られたものなのです。こういったものを総合的に調べながら、考古学が主として調査対象にしている土器や石器あるいは遺構といったもの以外の動植物資料や年代資料から、資源利用やその背景にある生態系を復元し、生活文化との関係性を明らかにしていくのです。

前置きが長くなりますが、日本列島における後期旧石器時代から現在までの生態系の移り変わりを見ておくことにいたします(図1)。生態系というと、ブナ林や針葉樹林、あるいは冷温帯落葉広葉樹林や暖温帯常緑広葉樹林などと言っているものですが、水田や畑といった人為的生態系も含まれています。このようないろいろなタイプの景観が作っている世界のことを生態系と言っているのです。手つかずの自然もあれば人が作り上げたものもあるわけです。これは関東地方を中心に描いたモデルですが、中部地方にもおおむねあてはまると思います。後期旧石器時代から現在までの長大な歴史を振り返ると、生態系は大きく変動してい

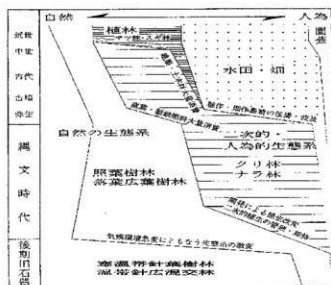


図1 日本列島における後期旧石器時代以降の陸域生態系の変遷 (辻 2002)

ることが分かります。大きく変動する時期がいくつかあります。ひとつは旧石器時代から縄文時代へ移り変わる時です。二つ目は縄文時代から弥生時代への移行期です。この二つの激変期は考古学でも古くから注目されてきましたので、環境史研究でも膨大な資料が蓄積されてきました。ところが古代から中世を経て近世にいたる時期については資料が乏しいのです。ここに示したのは関東平野の事例ですが、中部地方はもとより他の地方でも年代観がまちまちであって、列島全体を俯瞰できるような資料はまだ得られていないのです。研究者人口が少ないこともあります。古代・中世・近世の環境史に関心がもたれていないことも大きな理由です。笹本先生のように歴史学の対象

以外にまで踏み込んで調査される研究者がおられればいいのですが、一般には歴史時代の環境史には関心が希薄なのがふつうであるといってもいいと思います。殿村遺跡と周辺域は、中部地方における古代・中世・近世の環境史研究の出発点になればと期待しているところです。

人為がつくる生態系—いわゆる里山

ここでひとつ重要なことを申し上げておきたいと思います。里山についてです。弥生時代から水田稲作農耕が日本では本格的に伝播・拡大して日本の生態系は大きく変動してしまいます。そしてその勢いは古代まで続きます。弥生時代から古代までの生態系の変動を私は生態系の古代化と呼んでおります。古代までは一方的に生態系を人為的に作り変えてしまうような時期でした。ところが、古代末から中世、あるいはそれ以降は、縄文時代の生態系のようにたとえ人為的な生態系であっても長期にわたって維持していこうとする時期に転換するわけです。持続可能な生態系にしていこうと努力する時代と見ていいのではないかと思います。皆さんがよく里山という言葉をお口にいたしますよね。里山保全、里山保護、あるいは里山復活という運動を各地で多くの方や団体が展開していますけれど、そういう里山は私に言わせると新里山、新しい里山システムの時代です。先ほど竹原さんからご紹介いただきましたように、縄文時代の前期においても当時の人間は活発に自然に働きかけて自然の生態系を人為的に作り変えていくというようなことをやっていたのです。それはまた持続可能な生態系でもあったのです。このような縄文時代の人為生態系を私は古里山と呼んだのです。つまり縄文時代の古里山と古代末以降の新里山の二つに分けて考えたのです。この古里山の時代と新里山の時代の間に弥生時代から古代という生態系の大規模改変、正しくは資源の一方向的な搾取による生態系の古代化というのがあったと考えるのです。初めて日本という国号をかかげた古代律令国家が形成されるや、森林資源はもとより日本の自然の生態系からとくに森林資源を根こそぎ搾取していくということが国家的プロジェクトといってもいいような規模で進行したのです。そうした時代を経て、資源が枯渇しないようなシステムすなわち持続可能な生態系を創出するという時代になっていくのです。それが古代末から中世にかけて出現したわけです。私はそのように理解してきました。

関東平野での事例を見てもいいと思います(図2)。関東平野も広いですし、調査地域がいくらでもありますので、私はここで20年以上にわたって環境史の調査・研究を続けてまいりました。その結果、縄文時代から現代までの生態系の移り変わりというのが非常によく分かってきました。そこで弥生時代以降に

着目してみますと、段階的に生態系が変化してきたことが分かります。特に弥生時代に、これスギですけれども、関東平野はカシ類などからなる常緑広葉樹林が縄文時代からあり続けたところです。弥生時代になりますと水田稲作農耕が各地で拡大しますが、それとともにスギという針葉樹が特異的に増加した形跡があります。このスギは人為的に創出された植林と考えられるのですが、ここではスギ林という生態系が作られたと考えられるのです。スギは有用な木材資源であったために早くに植林によって増殖ははかられたというわけです。重要なのは次の段階です。マツ属です。この変化を見てみますと、中世と近世の2段階にわたって増加を遂げているのです。古代末から中世のいつであったかはまだ定かではありませんが、まずまずかですがマツ属が増加します。これは



図2 関東平野における完新世後半の陸生生態系の変遷 (辻1987)

は荒れ果てた山林にマツ属が増加を開始し、しだいに定着していく様子を示しています。その後、近世に入って、およそ17世紀後半と見積もられるのですが、マツ属が急激な増加を遂げるのです。このような増加のしかたは異常で、生態的にしだいに駆逐していく場合のロジスティック拡大ではないのです。つまり大量の苗を人が一気に植えるとかそのような人為がないと説明できないのです。

マツ属の増加はアカマツ林の拡大ととらえることができます。これは日本の人為生態系の歴史、あるいは里山の歴史を考えるとときに重要な問題です。松本市の北部は日本でも有数のマツタケ(松茸)の産地と聞いていたので、今日はすき焼きでもいただけるかと楽しみにしてきました。さきほど少し松茸ご飯をいただきました。マツタケが豊富だということは健全なアカマツ林が維持されていることを意味しています。

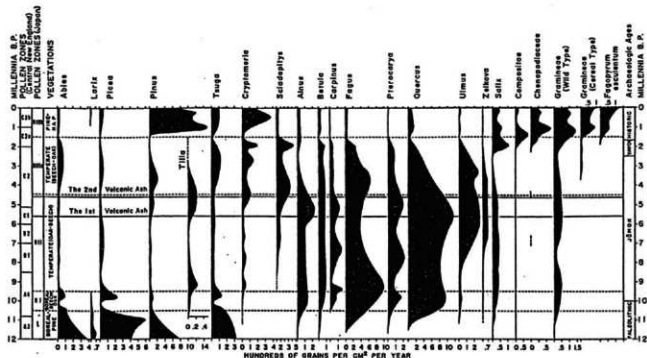


FIG. 4. Absolute pollen diagram in Lake Nojiri; original data have been smoothed by a moving average of three. The vertical scale is adjusted by considering C-14 dates and known dates of pollen zonal boundaries. Note that several different scales have been used on the abscissa.

図3 野尻湖底堆積物に記録された過去12000年間の植生史 (Tsukada, M. 1972)

アカマツは北海道を除く日本列島の隅々まで拡大した重要な針葉樹林になっていますが、これがいつどのように拡大し、増加してきたのかは重要な問題でした。生態学の人たちは意外に簡単に考えていました。弥生時代から古墳時代にかけて古墳の造営とかの土地造成によって元の植生が伐採され裸山になったところにしだいにアカマツが導入してきたと考えたのです。その結果アカマツが西日本から東北地方まで約1500年前に一気に拡大したと考えてきたのです。その標準地にされたのが長野県の北部の野尻湖での資料だったのです(図3)。野尻湖の湖底の堆積物を花粉分析という手法で調べてみたら約1500年前から突然マツ属花粉が増加したのです。これはワシントン大学にいた塚田松雄さんという長野県出身の研究者によってなされたのです。ただしこの1500年前という年代は推定値であって、測定されたものではありません。歴史時代の年代になると、生態学者などはけっこう簡単に推定してしまうのです。これが日本の生態系の歴史を議論するときの障害にもなっています。

こうした生態学の人たちの常識を打ち破ったのが、さきほどお話しした関東平野での私の調査の結果だったのです。マツ属が増加するのは2段階にわたって起こること、最初は中世で、ゴマヤソバといった畑作物の増加とおおむね一致していることから常畑が台地から低山地に拡大したことともなるものであろうと考えたのです。次の増加は近世江戸時代に入ってからで、突然増加するのです。どうして増えたのかということこれは幕府の政策だと考えられるのです。というのは17世紀後半における幕府の新田開発は広範囲に及んでいますが、単に水田耕地を拡大し整備するといったものではなく、関東平野は広大でかつ台地面積が相当なものですから、台地の開発にも相当な労力がかけられたとみられるのです。その典型的な一例が埼玉県の三富新田の開発だったと思います。アカマツ林、コナラ林など雑木林、畑地、そして居住地というふうな明瞭な区画がなされて計画的な街づくりがなされたのでした。美林であるアカマツ林は今でも見ることができます(図4)。アカマツは江戸城外堀などでの土木工事や都市域での建築材としてきわめて有用であるため、江戸周辺域で調達できるようなシステムが作られたのだと考えられるのです。それでは、中部地方やその他の地方でのアカマツ林の拡大はどうであったのか、その実態はまだまだ分からないというのが現状なのです。その意味において、松本市北方のアカマツ林がいつごろなぜ



図4 入間市三富新田のアカマツ林

できたのかは大きな関心事なのです。

さて、景観復原の方法や景観生態系を具体的に示すには殿村遺跡と周辺域を取り上げるのがもっとも説得力があるのですが、残念ながら描き上げるほどの資料はまだ蓄積されておりません。そこで、時代は縄文時代になってしまいますが、これまで描かれてきた典型的な一例として青森県の三内丸山遺跡の景観生態系としての集落生態系を見ていただきたいと思います(図5)。集落生態系とは、集住域だけでなく、集住する人々の生活を支える機能的な空間のことです。集住する人々が水田耕作をし、畑作をするのであれば田畑という人為生態系が包含され、山で林産物を営むのであれば山林も含まれ、河川や湖沼で漁労をするのであれば水域という生態系も含まれるわけです。もちろん海で漁労するのであれば沿岸や内湾が含まれることになりま

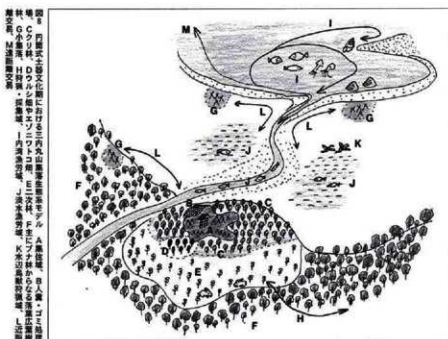


図5 縄文前期～中期の三内丸山集落生態系モデル (辻 2011)



図6 三内丸山集落生態系の復原景観 (一部)

す。三内丸山集落生態系は、中心に集住域があり、周辺にゴミ捨て場、クリ林、ウルシ畑やエゾニワトコ畑、そして二次林があり、漁労の場として川や内湾があり、さらに狩猟・採集域として周辺のブナ林があるといった具合です。集落とはけっして建物群だけではなく、生活にかかわる機能的空間が入っていないといけないのです。環境史研究においては、基本的にこのような捉え方をしなければ生活文化は語れないのです。

ところで、景観という概念についてですが、現代では人間の五感に関わる対象空間であるというのが世界的な捉え方です。例えばガンガンとやかましい音がしている所で永住することなんてなかなかできませんよね。あるいはものすごい悪臭を放つような所に住めといわれたらとても耐えられないのではないかと思います。私たちはおのずと生活しやすい空間、できるだけ快適に生活できる空間を居住域に探し出しているのだと思います。このような景観を考える分野が景観生態学なのです。景観とはランドシャフトというドイツ語で最初は説明され、それがランドスケープという英語になって普及しているのですが、持っている意味が

誤解されてきたのです。ただ見える対象だけでなく人間の五感の対象となる空間を私たちは景観と言っているのです。日本では簡単に景観と訳してしまったからいろいろ誤解が生じていますが、いま私が話したようなことがほしいこの景観だと思っただけでいいのではないかと思います。三内丸山集落生態系のジオラマの一部を見ていただきます(図6)。ここで紹介した景観生態系図といったものをもとにして、さらにこのような鳥瞰したジオラマを作りたいと考えているのです。殿村遺跡とその周辺域についても、それを最終的な目的の一つに掲げているのです。

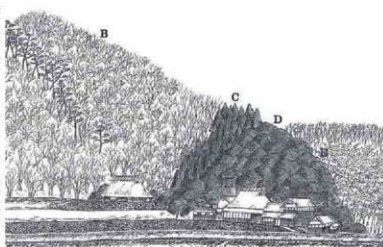


図7 北摂における里山の典型的な景観(服部ほか1995)

ここで現在の典型的な里山像を見ておきたいと思います。大阪平野北部の北摂で見られる典型的な里山の景観です(図7)。おそらく松本市あたりでの景観もこれに近いものではないかと思います。Aはアカマツ林、Bはコナラなどの落葉広葉樹林、Cはスギ植林、Dは常緑広葉樹林ですがいわゆる鎮守の森と呼ばれているものです。Eは竹林です。集住域の周辺には水田や畑があり、小高い山や谷みには聖域があってそこは鎮守の森になっています。すべてが集住する人々の生活にかかわっている空間です。人為がかかっていないところはなりません。これが里山であり、集落生態系なのです。殿村遺跡と周辺域ではこのような集落生態系がすでに中世にはできあがっていたのではないかと期待されるのです。

ついでながら1995年ころに描いた中世都市の環境システムを見ていただきたいと思います(図8)。最初の方でお話したように中世の16世紀から17世紀にかけては小氷期という寒冷な時期であったことが分かっており、希少・気候が不順であったと考えられています。平安時代までに拡大した禿山はしだいにアカマツ二次林やコナラなどの落葉広葉樹二次林に人為的に変えられ、薪炭供給する重要な空間となっていました。同時にアカマツ林にはマツタケが生育していたのです。集落が都市になるとシステムがいくぶん複雑になるのですが、基本的には集落生態系モデルで理解できるように思います。このような環境システムを考えるきっかけになったのは、国立歴史民俗博物館での洛中洛外四屏風の調査でした。鴨川から如意ヶ嶽にかけての京都の東山あたりを見ると面白い描写に接することができます。京都の東山の方ですね。中央には古田社と境内の参道が描かれています。参道はアカマツの並木になっていて、その下で熊手を用いて木の葉掻きをしているのが分かります。古田社は濃い緑で鬱蒼としています。これは常緑広葉樹林が聖域を彩っていたのです。近現代風には鎮守の森です。現在の里山で見られる景観が中世の京都という都市とその周辺です。アカマツ林は文化発展の象徴的なものだった可能性があります。



図8 中世都市を取り巻く環境システム(辻1994)

同じ洛中洛外風屏風ですが、少し場所を変えて北野天満宮を見てみても、やはり参道にはアカマツの並木が描かれています。注意してみると、立派なアカマツには周囲に樺が植えてあって、アカマツに直接寄り添えないようにしてあります。これは明らかに保護・保全のしるしです。古代ではアカマツはまったくといっていいほど見られませんが、いつごろアカマツが拡大し、また、いつからこのように樹木を保全・保存するようになったのでしょうか。中世における重要な問題ではないかと思えます。

ところで、ここ松本盆地周辺ではいつごろからアカマツが拡大し、マツタケが食されるようになったのでしょうか。それはこの殿村遺跡の試料の分析から明らかになってくることですが、幸いにも昨年は松本城の大手門跡の発掘調査の折にたくさんの試料をいただき、さらに井川城址の発掘調査にもなってたくさんの試料を採取することができましたので、近いうちに生態系の移り変わりが明らかになると期待しているところです。ただ、アカマツの拡大などに関しては少しずつ新たな資料が出てきておりますので、ここでお話ししたいと思います。簡潔に申し上げますと、中世の15世紀までにはアカマツが拡大していたことは間違いないさそうです。ということは松本の人々はそんなに早くからマツタケを食べていたということになるわけです。京都の都人と同じように早くからマツタケに親しんでいたというのはうらやましい話です。

環境史の一つの視点として木材資源と利用の関係をお話ししたいと思います。古代の木材利用樹種の分布図をまとめた図があります(図9)。古代とありますが、基本的には中世、近世も同様と考えていいと思います。森林植生はほとんど変わっていないからです。木材資源として利用された主要な樹種は、スギ、ヒノキ、モミ、サワラ、ヒバの5種なのです。これらはみな針葉樹で、日常生活とも深くかかわっている樹種です。針葉樹が重要な木材資源なのです。それは平城京を建設する時に使われた木材の80%はヒノキで残りはスギだとされていますが、それくらいものすごい大量のヒノキとスギが切りだされたのです。奈良周辺はもとより、近畿地方一円にわたって針葉樹がことごとく伐採されたので、山林は壊滅的な状態になったのです。それだけでも足りなくて長門国、今の山口県の方までスギを伐採しているのです。弥生時代から古代にかけて針葉樹利用は急速にエスカレートしていったのです。とくに西日本の森林は壊滅的な状態になり、回復できないくらいになってしまいました。こういう現象を私は生態系の古代化といったのです。

松本盆地一帯はどうかというと、モミ圏とサワラ圏が重なり合うところ。実は殿村遺跡で出土している木製品や木材片はサワラから作られたものがとても多いです。モミはさほど出土していませんが、殿村遺跡の周辺にはモミ属の1種であるウラジロモミが鬱蒼とした森林を作っていたことがいえるのです。サワラとウラジロモミ、そしてもう1種、ツガという針葉樹が中世においては重要な樹種であり、松本盆地一帯に繁栄していたと言えそうです。鬱蒼とした森林が実はこれも後でお話ししますが、周辺ウラジロモミの林が中世では鬱蒼とした林を作っていたということが分かってきております。ウラジロモミそしてツガ、この2種類。それに加えてサワラですね。この3種類の針葉樹が中世ではとても重要な樹種であって、それがかなり鬱蒼とした森林を作っていたのです。

さて、長野県においても里山の歴史を明らかにしようとした研究がなかったわけではないのです。前に

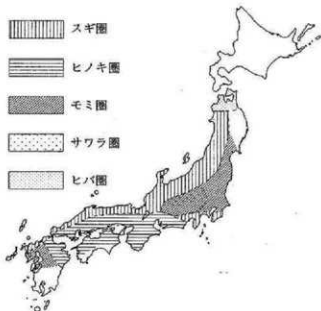


図9 古代の木材利用樹種図(鈴木 2002)

お話しした野尻湖での研究は、マツ属の拡大時期を1500年前に長らく固定してしまいましたが、その後、2004年に長野県自然保護研究所の取り組みがあって、ようやくこれを打破する新しい見解が得られていたのです。発表したのは富樫均さんほか2名で、「長野市飯縄高原の人間活動が自然環境に与えた影響とその変遷」(富樫ほか2004)と題する論文でした。もう10年ほど前になりますが、しまいこんですっかり忘れていたものです。これによると、「約3000年前の縄文後期から火入れを伴う人間活動が活発になり、森林植生への影響が顕著になった。約700年前の中世の時代には森林破壊が極大期に達し、森林が減少し草地在拡大した。その後、約400年前以降の近世になって火入れ行為が抑制され、森林が回復し、アカマツ林やスギ林が拡大した」というのです。これは花粉分析という手法で得られた結果です。堆積物に含まれる花粉を抽出して、種類を同定・計数するという手法です。これによって植生がどのように変遷してきたかが分かるのです。とても興味深い結果ですが、年代が明確ではありません。放射性炭素年代測定法という前にもお話しした方法で測定しているのですが、堆積物が1万年間で1mしか堆積していないのに、この間の測定値が3点しかなく、あまりに少ないのです。年代はとても重要なので簡単に割り切つてはいけないと思います。飯縄高原でのさらなる詳細な検討や、周辺域での追認調査が期待されるところで、おそらくこれからの殿村遺跡と周辺域の調査にまさるものはないと確信しております。

これまでの里山すなわち人為生態系の歴史について箇条書きでまとめておきました(図10)。

殿村遺跡から見える生活文化と生態系

殿村遺跡周辺の四賀の集落生態系の全景をまずながめてみたいと思います。いつもながらにきれいな写真なので、これを使わせていただきました(図11)。本当にきれいです。皆さんがおっしゃるように、ここに

人為生態系の段階的な拡大

- ・ 縄文時代の古里山形成
粟林・楡林などの農林業経営
- ・ 弥生時代から古代の稲作拡大と森林伐採生態系の古代化
- ・ 古代から中世の畑作拡大と森林保護
新里山形成・蕎麦畑作・赤松林育成
- ・ 近世の新田開発と木材大量消費・楡林
屋敷林・農用林・雑木林

図10 人為生態系の段階的な拡大



図11 殿村遺跡周辺の景観

来ると本当にホッとするような空間です。何かここにはすごいものがあるぞと思わせるような景観です。安心感を与えるというか、人を和ませるといふか、このような棲家としては申し分のない所は他になかなかないと思うくらい素敵な場所です。もちろんこうして上空から見た景色ではなくて、最初は南方に立って下から仰いだ景観であったわけです。今日も明科のほうへ連れて行っていただいたの帰りの道、山がつんと尖って見えるのです。桃源郷へ入ったような感じがしますよね。景観が整っている。先ほど申しましたように景観というのは人間の五感に関わる対象空間であるわけですから、すてきな景観というのは自ずと住みやすい空間ということになるわけです。そこで、景観の素晴らしさを景観生態学や環境学の立場から検証しようということで調査をしているのです。考古学者や歴史学者とは違う視点から殿村遺跡の重要性、特徴といったものを見つけ出したいと考えているのです。

日本の遺跡は海外の遺跡に比べて損をしているところがたくさんあります。日本は木造建築が多いですからいつか焼かれるか壊れればそれまでで、しっかりケアしないと朽ちてしまっただけで無くなってしまふのが普通だと思ってもいいでしょう。建物はなく、だから基礎しか残らない。遺構でしか確認できないわけです。世界遺産登録に向けた専門委員会の委員などをしているのですが、世界遺産登録に向けてのいろいろな問題を協議する中で、日本は柱穴や銅りこみなどしか残っていないから損をしているんだと話す時、意外にも、地下にいっぱい残っているでしょう、まだまだ重要な資料がいっぱい埋没しているでしょう、何も無理して建物を復元しなくてもいいのですよ、むしろ復元したものが嘘めいて見えるからやめたほうがいいですよ、などという返事が返ってくるのです。そんなことしないで世界遺産にできますよ、と慰められてしまうのです。日本の考古学者はそこまでの理解はしていませんね、多分、多分ね。古代であろうが中世であろうが、たとえ地下に埋もれていても十分に歴史的価値は現在まで持ち続けているのだと思います。余計な話をしましたが、私は、そうした遺構や遺物以外にもう一つ重要なものが埋もれていることをお話ししたいと思います。

私がこれからやろうとすることを説明しやすいので、このややラフに描かれた絵図を使わせていただきます(図12)。先ほどの上空から見た鳥瞰した写真と同じところを描いてありますが、これは寺院や道路、街並み、そして山の表面と植生、それだけしかないので、メルクマールになるものが書いてあってその他は空白なものですから、私がこの空白域に何があったかをさまざまな分析結果をもとにして描いていけばいいのです。



図12 殿村遺跡周辺の景観を描いた絵図

お絵かきの宿題を与えられたようですね。空白部にはどのような植生があったのか、アカマツ林だったのか、畑だったのか、あるいは想像を絶するような別のものがあったのか、全部余すところなく描き上げるのです。なんだかわくわくしてきます。もうすでにいろいろなことが分かっているのです、こころみにいくつか書き足してみることしましょう。虚空蔵山一面には基本的にブナを主体としてウラジロモミを交える冷温帯林が掛けそうです。そしてその下にはツガの林がある。そしてさらにその下あるいは岩が出ているような所にはアカマツ林

があるといった具合です。どうしてそんなことが分かるのかというと、さきほど飯綱高原の里山の歴史をお話した時に花粉分析という手法を紹介しましたが、その花粉分析の手法を殿村遺跡や虚空蔵山斜面の堆積物にも適用したのです。そう遠くない日に地図全域にわたってどのような植生があり、どのような土地利用がされていたかが描けるのではないかと期待しています。

さて、この写真はなんでしょう（口絵 2-2-a）。すごく重要な写真で、顕微鏡で見た写真です。まさか殿村遺跡からこのようなものが出てくるとは思ってもみなかったのです。ヘドロみたいな堆積物からこのようなピンのような形をした黄褐色のものがうようよと顕微鏡の中を泳いでいるように見えるのです。だいたい60ミクロンくらいです。60ミクロンですから0.06mmです。そう言われても実感が持てないかもしれませんが、これは健全な、健康な皆さんでしたら必ずお腹の中に持っているものです。実は寄生虫の卵です。形が特徴的なので鞭虫卵であることが分かります。昔、私が小学生の頃ですから50年も前になりますが、そのころの検便では鞭虫が何匹とか、回虫が何匹いましたと先生に報告していました。卵ではないのでもっと大きかったのですが、それでも鞭虫を見たことなかったし、みんなも知らなかったはずですが、みんな嘘ついていたのかもしれない。当時は寄生虫がいるからこそ健康だったのですから。これが鞭虫卵です。昔私たちが小学生の頃ってまだ検便ってやっていました。鞭虫が何匹いるかという。

これはちょっと変な形をしていますね（口絵 2-2-b）。ぶよぶよとしています、ここが出口、両方筒みたいになっています。さきほどの鞭虫も両側が筒みたいに抜けていましたが、これは種類が違って回虫卵です。だいたいこういうふうに戻虫卵と鞭虫卵を持っている人は健康なのです。何もない人というのはちょっと気色悪いかもしれない。これらは殿村遺跡の隅々このくぼみにあったヘドロのような堆積物を花粉分析の手法で調べてみたら、花粉よりも寄生虫の卵の方が目立って入っていたのです。周辺にある黄色っぽく見えるごみみたいなのはすべておなかの中をとってきた未消化物です。ウンチを顕微鏡で見るとこんなふうな未消化物がいっぱいあって、たぶん寄生虫の卵もたくさん含まれているはずですが。

同時期の別の堆積物からは、さらに興味深いものがぞくぞくと出ています。すでに委託で分析されていた資料を繰ってみますと、まずはメロンの種子が目を引きまします。しかも驚いたことにただのメロンではなくて種子のサイズがとても大きなモルディカメロンなのです。モルディカメロンというのは学名でククミス・メロ・パラエティ・モルディカといいます。これはラテン語の名前です。マクワウリ・シロウリも出ていますが、これはみなさんご存じのようにあのおいしい真桑、そしてお漬物にする瓜のことです。とにかくモルディカメロンが出ていることは注目すべきことです。これまでの資料からは古代に特異に食べられていたものなのです。特異というのは上流の貴族、宮中の人々や、政府の出先機関くらいしか出てきた記録がないのです。現在も残っていることは残っているのですが、日本で3か所、ひとつは八丈島、東京都の八丈島です。もう一つが能登です。そして3か所目が五島列島の福江島です。二つは離島で、もう一つが能登。変な所と言ったら能登の方に申し訳ありませんけれど、ちょっとかけ離れた所に残っているのです。上流階級の宮中の人々しか食べていなかったということとどのようにむすびつくだのでしょうか。実際、古代では平城京や平安京、遠方になります宮城県の高賀城とかでしか記録がないのです。おどろくべきことは、そのようなものが中世の殿村遺跡からどうして出てくるのかということなのです。

それからモルディカメロンの種子と一緒に出てくるものにベニバナの花粉があります。これは面白い植物です。さらにナスの種子と一緒に出てくるのです。モルディカメロンといい、マクワウリ・シロウリ、ベニバナ、ナスといった一見何の関係もなさそうな植物の花粉や種子と一緒に出てくる事例というのは、便所以外にはこれまで見たことも聞いたこともありません。便所以外には考えられないのです。殿村遺跡のどこなのか場所を確かめてはいないのですが、場所を確認いただきたいと思います。これで殿村遺跡の建物の中の便所がほぼ特定できたわけです。

殿村遺跡の便所と目されるところから出てきたベニバナの花粉はこのようなコンペイトウのような形をしています（口絵 2-2-c）。この花粉が大量に出てくるのです。ベニバナといいますと園芸趣味をお持ちの方ならよくご存じだと思いますが、一般には黄色と紅色の染料になる植物です。花から採りますので、染料には花粉が大量に含まれているのです。奈良の藤ノ木古墳の石棺の中に紅色に染まったところがあるというので分析して調べてみると、ベニバナの花粉が大量にでてきたというので、ベニバナによって染められた衣類が添えられていたことが分かったのです。一方、ベニバナというと薬用につかわれていた可能性もあるのです。女性の口紅につかわれていたベニバナがなぜ便所から出てくるのでしょうか。女性の紅とうんこが一緒に出てくる可能性は否定できませんが、あまり考えたくないですね。それを検証する方法がないものかと思うのですが、ベニバナというのは古代から重要な植物であって、古墳時代から古代にかけて中国から日本に持ち込まれたと考えられています。しかし中国が原産地ではなく、シルクロードを経由して地中海沿岸から中国にもたらされたものだったのです。シルクロードを経由して中国にやってきたものがさらに日本にやってきたものはたくさんあるのです。それらは古代では宮中の人々だけのものではあつたはずなのに、中世になって大衆や地方へ分散していったのです。そういったものが中世のこの殿村遺跡で出てくるというのはたいへん興味深いものがあります。

もう一つ興味深いものをご紹介します。まだ時代が確定したわけではありませんが、ソバの花粉が大量に出てくる堆積物が見つかったのです（口絵 2-2-d）。どこからかといいますと虚空蔵山の山城なのです。今発掘現場に行かれたらご覧になれると思いますが、石垣を積んだ平坦な場所が何段かできていますね、あの一番上の方ですけれども、その溝を埋める堆積物から出てきたのです。他の植物の花粉もあることにはあるのですが、ソバの花粉が圧倒しているのです。あんな高い所でどうしてソバを作っていたのでしょうか。現在はスギの植林になっているところで、鬱蒼としています。ソバを育てるには日当たりのよい土壌がからった場所であればなりません。この堆積物が中世のものだとすると、そこにはソバの畑があつたことになりまう。

殿村遺跡と周辺域の花粉分析の結果を総合しますと以下のようなことが言えそうです。周辺域にはウラジロモミがツガをともなつて森林を形成していました。ツガは針葉樹ですが、現在ではほとんど見られない樹種だと思います。ウラジロモミとツガが主要な森林は資源としてもたいへん重要だつたと思います。こうした温帯性の針葉樹はとくに建築材として重宝されていたからです。それからアカマツ林がすでに形成されていました。マツタケ山でもあつたわけです。平安時代の終わりごろから松茸を食したという記録がありますから、都人と同じくこの地方の人々も早くからマツタケを食していたのかもしれない。周辺ではソバ畑やメロン畑など畑作が行われていました。

ところで、殿村遺跡の便所と目されるところから出てくる花粉や種子・果実は多種類にのぼり、複雑な構成になっています。メロンの種子やイネの籾が一緒に出てくるのは、いわゆる生ごみを排泄物に投入した結果だろうと思います。便所は排泄物を溜めておくだけでなく、肥料を作るところでもあるのです。いわゆる金肥です。メロンの種子やナスの種子などは生ごみで、稲藁や籾は発酵させて肥料にするためのものでしょう。いずれにしても殿村遺跡に肥料づくりを目的とした便所が存在したことは興味深いですね。いずれにしても肥溜め・肥料目的の便所があつたことも分かつたわけです。

殿村遺跡の調査からは食料や持ち物について新しい情報もたらされる可能性があります。考古学の研究対象になっている焼き物や、白磁・青磁といった磁器はもちろんのことですが、植物についても膨大な情報が眠っていると思います。モルディカメロンやベニバナがそうでした。なぜ上流階級の人々しか利用していなかったと考えられる植物が出てくるのか。それらが外から持ち込まれたのか、あるいは栽培されていたのか、いずれにしても殿村遺跡で生活していた人々の生活文化を考えるうえで興味深いものばかりです。

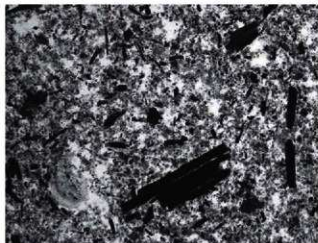


図13 井川城跡の堆積物を構成する微粒炭

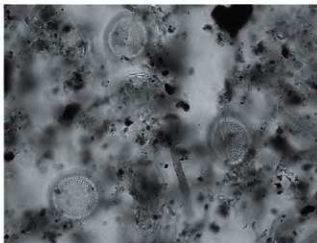


図14 同 箱状構造堆積物から検出されたサイカチ花粉

殿村遺跡と周辺城の景観を復原するうえで、いま発掘調査が進められている井川城址の調査はとても重要です。松本盆地の環境史へと展開できる可能性を秘めているからです。井川城址の場合はとくに井川城と周辺城の景観を復原するための膨大な情報が引き寄せそうな気がいたします。井川城址ではすでに古代から城が営まれた中世、そして近世にいたるまでトレンチから多数の試料を採取しておりまして、一部は分析結果も得られています。その結果というのが驚きなのです。中世よりも古くて古代かもしれないという堆積物を見てみますと、微粒炭という顕微鏡的な大きさの炭片ばかりが出てくるのです（図13）。出てくるというより微粒炭だけでできているといったほうがよいかもしれません。これはおそらく野焼きによってできたものだと思います。花粉や胞子はほとんど出てこないのですが、これは野焼きによってできた炭の量が圧倒しているからです。含まれていたとしても遠方から飛来したマツ屑花粉くらいでしょう。このような堆積物が何層にもわたって堆積しているので、野焼きが頻繁に行われていたのかもしれないと推測しています。当時の田んぼの稲刈りというのは穂刈だったようです。必要な稲藁は確保してあとはみんな焼いたのではないかと考えているのです。なぜかという堆積物から出てくるプラントオパールがイネの葉に由来するものだからです。

井川城址が営まれていたころの堆積物からは意外な植物の花粉が出てまいります。表面が網目の文様になっている独特の形態をしている花粉です（図14）。この花粉はサイカチというマメ科の植物に同定されます。これまでに日本で出ているところといえば3か所しかないのです。江戸城外堀の溜池遺跡と同じく江戸城外堀の飯田橋遺跡、もう一つは埼玉県行田市の忍城址です。いずれも中世・近世の城址で、しかも堀の中の堆積物からです。サイカチという植物はご覧になった方もおられるかと思いますが、尖ったトゲが密生するという特徴があるのです。つまりたいへん危険な植物なのです。韓国のいなかへ行きますと、家と家の間にサイカチの生垣をしばしば見ることができます。これは境界を越えて立ち入れないようにしているのです。防衛の目的があるのです。上記の例からも明らかのように、サイカチが堀に沿って植えられていたと考えられます。外から進入できないようにしたのでしょう。

中世の生活文化

海を越えて日本にもたらされた植物が中世にはたくさんあったように思います。代表的なものにチャノキ（茶）があります。これはよく知られているように禪宗を日本に伝えた栄西が持ち帰ったものとされています。その後急速に伝播し、伏見から各地へ伝播し、栽培されるようになったものです。私はこれまでの調査から、禪宗とともに日本に持ち込まれたものはもっとたくさんあったに違いないと思うようになりました。イチョウもその一つです。神社にも寺院にも植えてあるあのイチョウです。これは神仏習合ゆえにどちらにもあるのだと私は考えているのです。さらにセンノウという植物がありますが、これなどはチャノキとともに日本

にもたらされたものではないかと思ます。なぜかというセンノウはお茶の花でもあるからです。さきほどお話ししたメロンや同じウリ科のヒョウタン（ユウガオ）なども検討の余地があるかと思ます。イチョウなどは仏教の伝来とともに日本にやってきたものと言われてきましたが、古代には記録もなく、また植えられていたという証拠もありません。こうした証拠もなく古代に伝えられたものとして扱われてきた植物については再検討をしておかなければならないと思ます。古代末から中世に日本に入ってきたものがとても多いように考えられるからです。なぜこのようなことをいうのかというと、中世の植物文化は舶来のものでとても多く、しかも急速に日本各地へ伝播し流行した可能性が大きいからです。中世の遺跡発掘調査においては舶来の植物文化にも目を向けておかななくてはならないと思ます。その意味で殿村遺跡の発掘調査には期待するところが大きいのです。そういう期待をしながらそろそろ私の話を終わらしていただこうと思ます。雑多な話をさせていただきましたけれども、多少とも環境史というものの見方をご理解いただけたかと思っております。また、あまり調査されてこなかったこともあります、やればとても面白いことが分かってくると期待ももっていたかと思ます。どうぞご期待ください。どうもありがとうございました。

挿引参考文献

鈴木三男 2002 『日本人と木の文化』八坂書店

Tsukada, M. 1972 The history of Lake Nojiri, Japan Connecticut Academy of Arts and Science Trans, 44 pp.339-365

辻 誠一郎 1987 「最終間氷期以降の植生史と変化様式—将来予測に向けて—」『百年・千年・万年後の日本の自然と人類—第四紀研究にもとづく将来予測—』古今書院

辻 誠一郎 1994 「中世都市を取り巻く環境」『歴史読本』39巻21号（1994年11月号）

辻 誠一郎 2002 「日本列島の環境史」『日本の時代史1 倭国誕生』吉川弘文館

辻 誠一郎 2011 「縄文時代前・中期の三内丸山集落生態系史」『東北芸術工科大学東北文化研究センター—研究紀要』10

富樫 均・田中義文・興津昌宏 2004 「長野県飯綱高原の人間活動が自然環境に与えた影響とその変遷」『長野県自然保護研究所紀要』第7巻 pp.1-16

服部 保・赤松弘治・武田義明・小館誓治・上浦木昭春・山崎 寛 1995 「里山の現状と里山管理」『人と自然』6



殿村遺跡発掘調査と報告会・講演会の記録

<平成20・21年度>

殿村遺跡第1次発掘調査（学校建設のための事前発掘調査）

<平成22年度>

殿村遺跡第2次発掘調査（殿村遺跡調査事業に係る発掘調査の開始）

殿村遺跡とその時代Ⅰ

平成23年3月19日開催

講演「殿村遺跡とその時代—中世の山寺・山城・居館—」

講師 中井 均 氏

<平成23年度>

殿村遺跡第3次発掘調査

<平成24年度>

殿村遺跡第4次発掘調査・虚空蔵山城跡第2次発掘調査

殿村遺跡とその時代Ⅱ

平成24年4月14日開催

講演「殿村遺跡とその時代—中世の整地と人々の暮らし—」

講師 中澤克昭 氏

殿村遺跡とその時代Ⅲ

平成25年3月16日開催

講演「殿村遺跡とその時代—虚空蔵山城と中ノ陣城から見た戦国時代—」

講師 笹本正治 氏

<平成25年度>

殿村遺跡第5次発掘調査・虚空蔵山城跡第3次発掘調査

殿村遺跡とその時代Ⅳ

平成25年10月12日開催

講演 殿村遺跡とその時代—環境史から見た中世の景観—

講師 辻 誠一郎 氏

殿村遺跡とその時代Ⅳ

—平成25年度調査報告会・講演会の記録—

発行日 平成27年3月31日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 精美堂印刷株式会社
